北海道教育大学学術リポジトリ
Hokkaido University of Education Repository
国立大学法人 北海道教育大学
HOKKAIDO UNIVERSITY OF EDUCATION

図画工作科の作品制作において児童が「できた」と思う要因

メタデータ	言語: Japanese
	出版者:
	公開日: 2019-10-08
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 中村, 珠世, 李, 知恩, 森實, 祐里, 菊地, 惟史
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://doi.org/10.32150/00006823

北海道教育大学紀要（教育科学編）第70巻　第１号　　令和元年８月
Journal of Hokkaido University of Education（Education）Vol. 70, No.1　　August, 2019

図画工作科の作品制作において児童が「できた」と思う要因

中村　珠世・李　　知恩*・森實　祐里**・菊地　惟史***

北海道教育大学附属札幌小学校
*北海道教育大学札幌校デザイン研究室
**札幌市立大倉山小学校
***札幌市立円山小学校

Factors that Elementary School Students Think They Have Completed Their Art Work

NAKAMURA Tamayo, LEE Jieun*, MORIMI Yuuri** and KIKUCHI Tadafumi***

Fuzoku Sapporo Elementary School of Hokkaido University of Education
*Department of Art Education, Sapporo Campus, Hokkaido University of Education
**Sapporo Okurayama Elementary School
***Sapporo Maruyama Elementary School

概　要

本研究は，小学生が図画工作科の作品をつくる際に「できた」と終える姿と，「もっとしたい」と続けようとする２種類の姿が見られることから，「できた」と決める判断の背景に働いている意識を明らかにすることを目的としている。「できた」と思う要因について，小学校４，５年生61名（５年男17名・女15名，４年男15名・女14名）にアンケートによる調査を行った。仮説では「できた」と終わりを決めることに影響を及ぼしているのは，おそらく材料や終わりの時間などの外的要因であると考えた。しかし，調査の結果からその外的な要因ではなく，個人の満足や手応えなど内面に関する意識が強く，子どもは自分自身で納得して決めることを大事にしているということが明らかになった。

Ⅰ　はじめに

図画工作科の作品制作において，活動の終わりには２種類の子どもの姿が現れる。一つは「できた」と作品制作を終える姿，もう一つは「もっとしたい」と作品制作を続けようとする姿である。学習指導要領によれば図画工作科の学習でつくり，つくりかえ，つくり続けようとする姿は，児童の資質・能力が自然に発揮されている姿とも言えるとある。[1] 図画工作科の学習において児童の資質能力を確かに育んでいく上で，後者の「もっとしたい」というような価値追求に向かう児童の姿が見られる授業が求められていると言えよう。

子どもがつくり，つくりかえ，つくりつづける

ということについて，青木善治（2017）は次のように述べている。「子どもにとっての造形行為は，様々な「もの・ひと・こと」にかかわりながら，材料の色や形のよさやおもしろさから思いを広げて，新しい意味を「作品」としてつくると同時に，自分の見方や感じ方や表し方を完結させることなく，自分をつくり，つくりかえ，つくり続けている」[2]。この考えに立つなら，子どもにとって「作品」とは単なる「もの」ではなく，その子にとっての意味が込められているものであると言える。また，制作途中の作品に働きかけ，そこから感じ，考え，つくることを繰り返していく中で，子どもは常に自分の感じ方や表し方を働かせながら意味をつくり続ける。「もっとしたい」と続けようとする姿はそのような現れの一つと考えられる。

では，作品制作に当てられた授業時間の終わりに「できた」と声を上げる児童の現れについてはどのように考えられるだろうか。実際の授業場面においてそのような子どもの姿は少なくない。このような児童の判断が，つくり，つくりかえ，つくりつづけた結果としてのものなのか，またはその他の意識が背景にあるのかということについて述べている研究は見られず，これを明らかにすることはこれからの図画工作科の授業の在り方を考える上で有効であると考える。

そこで，本研究では授業によく見られる子どもの姿のイメージから，「できた」と終えるのは「終わりの時間になったから」という意識が多いのではないかという仮説にたち，「できた」「終わった」ということに対して子どもがどのように認識しているのかを調査した。調査は質問への回答や記述に子どもの意識が明確に表れる必要があることを考え，４年生及び５年生の児童を対象に，その当時行なっていた題材が終了した直後にアンケート形式で行うこととした。

Ⅱ　調査方法

２．１　調査参加者

所属：小学生（４，５年生）

人数：61人（男32，女29）

調査実施：2018年７月

調査時に終えていた学習

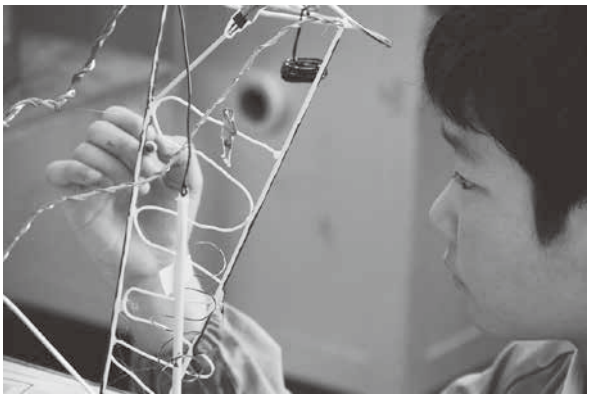
４年生「ドリームマンション」

～絵や立体，工作に表す～（全４時間）

一人１個の段ボールで住んでみたい家をつくり，その後，それぞれの家を合わせ，グループで１つの建物にする学習である。

５年生「広がる線の世界を楽しもう」

～絵や立体，工作に表す～（全６時間）



針金や竹串などの線材を組み合わせ，自分の思い描く「あそびば」を表す学習である。

２．２　質問紙構成

２．２．１　「できた」と決める要因

美術教育を専攻とする３名の現職教員及び大学教員により，図画工作科の学習場面における児童の様子について，「できた」と決めた背景にある

意識として考えられることを調査し，分類・整理した。その結果，質問項目は「できた」と判断したタイミングに関するもの３項目，要因に関するもの７項目となった。回答はそれぞれの項目に対して“とても当てはまる（５点）”から“全然当てはまらない（１点）”の５件法で求めた。

また，「時間内に終わらなかった」という項目に対して“当てはまる（４点）”と“とても当てはまる（５点）”を選択した児童について，その理由を記述してもらうとともに，欲しい時間を分単位での回答し，その理由を記述で求めた。

２．２．２　「作品のお気に入り度」に対する意識

自分の作品に対しどの程度気に入っているのかについて，“すごく気に入っている（５点）”から“全然気に入らない（１点）”の５件法で回答を求めた。

２．２．３　「もう１時間続けるか」

もしもう１時間あるとしたら作品作りを続けるかどうかについて，“絶対続ける（５点）”から“絶対続けない（１点）”までの５件法で，またその理由について記述での回答を求めた。

２．２．４　「よかった」と感じていること

学習（題材）を通して子どもが「よかった」と感じたことに対して考えられる内容を９項目あげ，回答を“とても当てはまる（５点）”から“全然当てはまらない（１点）”の５件法で求めた。

２．２．５　基本的属性

回答者の性別および学年，感想などの自由記述欄を設けた。

２．２．６　倫理的配慮

調査は無記名式で行うとともに，回答は直ちに記号化されコンピュータによって統計的に分析されるため個人が特定されることはないこと，個人情報の保護に最大限の配慮をすることを口頭にて説明した。

Ⅲ　調査結果及び考察

３．１　「できた」と決める背景

まず「できた」と決めたタイミングについての全体，男子，女子それぞれの平均値と標準偏差を求め，表１に表す。

表１　「できた」と決めたタイミング　平均（標準偏差）

選択肢	全体(=61)	男子(=32)	女子(=29)
1.終わる時間の前	3.03(1.54)	3.43(1.48)	2.59(1.47)
2.終わる時間ギリギリ	3.05(1.62)	3.00(1.60)	3.10(1.65)
3.終わらなかった	2.00(1.41)	1.78(1.31)	2.24(1.48)
F	6.96 **	7.91 **	1.69 ns

+p<.10 *p<.05 **p<.01

「できた」と決めた３種類のタイミングについての参加者内分散分析を行った結果，全体（$F_{(2, 120)}=6.96$，$p<.01$）では「終わる時間の前」と「終わる時間ギリギリ」で平均値が最も高く，「終わらなかった」は２つに比べて低い結果を示した。続いて参加者間分散分析を行った結果，男子（$F_{(2, 62)}=7.91$，$p<.01$）では「終わる時間の前」で最も平均値が高く，続いて「終わる時間ギリギリ」であった。女子（$F_{(2, 56)}=1.69$，ns）では「終わる時間ギリギリ」で最も平均値が高く，「終わる時間の前」と「終わらなかった」は低い結果を示した。また，「終わる時間の前」での平均値は男子が女子よりも明らかに高い結果を示した。これらから，男子の方が「終わりの時間」によって「できた」を決めるのではなく，その前であっても納得したから「できた」と決める傾向にあると考えられる。

次に，「できた」と決めた７種類の理由について，全体，男子，女子それぞれの平均値と標準偏差を求め，表２に表す。

「できた」と決めた７種類の理由についての参加者内分散分析を行った結果，全体（$F_{(6, 360)}=36.46$，$p<.01$）では「予想以上にできた」で平均値が最も高く，「十分にやり尽くした」「計画

表２　「できた」と思った理由

項目	全体(=61)	男子(=32)	女子(=29)
①材料がなくなったから	1.57(1.08)	1.56(1.09)	1.59(1.07)
②計画通りにできたから	3.59(1.34)	3.94(1.34)	3.21(1.21)
③ある程度できたから	2.87(1.43)	2.94(1.52)	2.79(1.32)
④予想以上にできたから	3.80(1.33)	4.03(1.24)	3.55(1.38)
⑤十分にやりつくしたから	3.79(1.37)	4.09(1.26)	3.45(1.40)
⑥終わりの時間になったから	1.93(1.33)	1.69(1.04)	2.21(1.54)
⑦これ以上やったら変になりそうだと思ったから	1.89(1.30)	1.59(1.09)	2.21(1.42)
	F 36.46 **	29.63 **	10.50 **

+p<.10 *p<.05 **p<.01

通り」も高い値を示した。一方,「材料がなくなった」で最も低く,「これ以上やったら変になる」「終わりの時間になった」も低い値を示した。

平均値の高い結果，低い結果それぞれに大きな差は認められず，続いて参加者間分散分析を行った。その結果，男子（$F_{(6, 186)}=29.63$，$p<.01$）では「十分にやり尽くした」で最も平均値が高く，「予想以上にできた」「計画通り」も同程度の高い値を示した。女子（$F_{(6, 168)}=10.50$，$p<.01$）では「予想以上にできた」で平均値が最も高く，「十分にやり尽くした」「計画通り」も高い値を示した。男子も女子も平均値が高い理由は全体と同じ結果を示した。

また，男女間で見ると，「予想以上にできた」（男子$M=4.03$，女子$M=3.55$），「十分にやり尽くした」（男子$M=4.09$，女子$M=3.45$），「計画通り」（男子$M=3.94$，女子$M=3.21$）で男子の方に高い値が見られ，「これ以上やったら変になりそう」（男子$M=1.59$，女子$M=2.21$）で女子の方に多い値が見られた。

これらから，子どもは表したいことが十分にできたら時間に関係なく「できた」と決める傾向にあると考えられる。また，全体，男子，女子いずれにおいても，「時間」とともに「材料」で同様の低い結果を示しており，これらの外的な理由で「できた」とは思わないと考えられる。子どもは「時間」に合わせて表現を終えるだろうという仮説とこれらの結果は異なるものであった。子どもが「できた」と終わりを決めることと「時間」はあまり関係がなく，「十分にできた」「予想以上にできた」「計画通り」など，個人の満足や手応えなど内面に関することが「できた」の決定に影響していると考えられる。

次に「できた」と決めた要因７項目に対して最尤法・Promax回転による因子分析を行った。Promax回転後の最終的な因子パターンと因子間相関を表３に示す。

表３　「できた」と決めた要因の因子分析結果（プロマクス回転後の因子パターン）

	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ
⑦これ以上やったら変になりそうだと思ったから	.67	−.23	.14
⑥終わりの時間になったから	.61	−.17	−.16
①材料がなくなったから	.57	.24	.02
③ある程度できたから	.45	.19	−.01
②計画通りにできたから	.03	.99	−.01
④予想以上にできたから	.12	−.14	.84
⑤十分にやりつくしたから	−.09	.14	.52
因子間相関　Ⅰ	−	.03	−.23
Ⅱ		−	.23

第１因子は自分の作品制作と強く結びつかない項目など「妥協」因子とした。表２の結果で低い値を示した項目が集まったものである。第２因子は１つしかないが，「計画通り」という項目から「計画」因子とした。第３因子は「予想以上」「十分にやりつくした」という項目から「満足」因子とした。

表２で示した７項目の値を３つの因子にまとめ，その平均値を表４に示す。

表４　「できた」と決めた要因の因子ごとの平均

項目		全体(=61)	男子(=32)	女子(=29)
妥協	⑥終わりの時間になったから	1.93	1.69	2.21
	⑦これ以上やったら変になりそうだと思ったから	1.89	1.59	2.21
	①材料がなくなったから	1.57	1.56	1.59
	③ある程度できたから	2.87	2.94	2.79
	平均	**2.07**	**1.95**	**2.20**
計画	②計画通りにできたから	3.59	3.94	3.21
	平均	**3.59**	**3.94**	**3.21**
満足	④予想以上にできたから	3.80	4.03	3.55
	⑤十分にやりつくしたから	3.79	4.09	3.45
	平均	**3.80**	**4.06**	**3.50**

「妥協」に該当する４項目の全体の平均値は「計画」「満足」に該当するものと比べて明らかに低く（「妥協」2.07に対し「計画」3.59,「満足」3.80），「計画」と「満足」の２つの要因が個人の内面にあり，「できた」の決定に影響を及ぼしていると考えられる。また，「計画」と「満足」では男女の平均値の差が「妥協」に比べ大きく（「妥協」男女差0.25,「計画」0.73,「満足」0.56），男子の方が高い値を示している。

そこで，「計画」と「満足」，２つの因子間における男女の傾向をみるため，３つの因子負荷量を性別と学年で比較した結果を表５に示す。

表５　「できた」と決めた要因の因子と男女・学年の相関

		性別	学年
1 妥協	F比	1.5564	0.2699
	p値	0.2174	0.6054
2 計画	F比	4.5588	0.4888
	p値	0.0371*	0.4873
3 満足	F比	2.9912	0.0854
	p値	0.0891+	0.7712

+p<.10 *p<.05 **p<.01

「計画」において男女によって有意な差（$p=0.04$）が見られた。「満足」では男女によって有意な傾向（$p=0.09$）が見られた。また，学年による有意な違いはどの因子においても見られなかった。続いて，「計画」「満足」における参加者間分散分析を行い，男子と女子の結果を表６に示す。

表６　「計画性」「満足感」と男女の平均値及び標準偏差

	男子		女子		F
	Mean	S.D.	Mean	S.D.	
2　計画	0.2421	1.0218	−0.267	0.8698	4.21*
3　満足	0.179	0.688	−0.197	0.914	3.22+

+p<.10 *p<.05 **p<.01

「計画」において男の方が女子よりも高い値を示した（$F_{(1,59)}=4.21$，$p<.05$）。また，「満足」より「計画」において表５の結果同様，男子に有意な差が認められた。また，表２の結果では「②計画通りにできたから」の項目における男女の平均値の差が他の項目に比べ最も大きかった（②の男女差0.73，すべての項目の男女差の平均0.45）。これらから男子の方が「計画」ということに対し，高い意識を示していると考えられる。

３．２　手応えや満足感の要因

子どもが図工の時間において「よかった」と感じたことについて全体，男子，女子それぞれの平均値と標準偏差を求め，表７に示す。

「よかった」と感じた９種類の項目について参加者内分散分析を行った結果，全体（$F_{(8,480)}=10.44$，$p<.01$）では「新しいアイデアが思いついたこと」で平均値が最も高く，「自分の思うような方法でできたこと」「作品が出来るまでの変化が見られたこと」も高い値を示した。一方，「友達から認められたこと」で最も低く，「先生から認められたこと」も低い値を示した。

平均値の高い結果，低い結果それぞれに大きな差は認められず，続いて男女による分散分析を行った。その結果，男子（$F_{(8,279)}=3.60$，$p<.01$）では「新しいアイデアが思いついたこと」で平均値が最も高く，「作品が出来るまでの変化が見られたこと」「自分の思うような方法でできたこと」も高い値を示した。女子（$F_{(8,224)}=7.73$，$p<.01$）では「新しいアイデアが思いついたこと」で平均値が最も高く，「自分の思うような方法でできたこと」も高い値を示した。男子も女子も平均値が高い理由は全体と同じ結果を示した。

男女間で見ると，「新しいアイデアが思い付いたこと」（男子$M=4.38$，女子$M=4.55$），「自分の思うような方法でできたこと」（男子$M=4.25$，女子$M=4.38$），「新しい材料が使えたこと」（男子$M=3.84$，女子$M=4.00$），「新しく出来るようになったこと」（男子$M=3.88$，女子$M=4.03$）で女子の方に高い値が見られた。一方，「作品が

表7　よかったこと

項目	全体(=61)	男子(=32)	女子(=29)
①友だちから認められたこと	3.16(1.33)	3.16(1.42)	3.17(1.23)
②先生から認められたこと	3.50(1.33)	3.59(1.25)	3.38(1.40)
③新しい材料が使えたこと	3.91(1.15)	3.84(1.25)	4.00(1.02)
④自分の思うような方法でできたこと	4.31(1.11)	4.25(1.12)	4.38(1.10)
⑤新しくできるようになったことがあったこと	3.95(1.23)	3.88(1.32)	4.03(1.13)
⑥新しいアイデアが思い付いたこと	4.46(0.86)	4.38(0.86)	4.55(0.85)
⑦満足いくまで出来たこと	4.03(1.19)	4.19(1.18)	3.86(1.17)
⑧表し方を試しながらできたこと	3.90(1.07)	4.13(0.96)	3.66(1.12)
⑨作品ができるまでの変化が見られたこと	4.20(1.07)	4.31(1.01)	4.07(1.11)
F	10.44 **	3.60**	7.73**

+p<.10 *p<.05 **p<.01

出来るまでの変化が見られたこと」(男子$M=4.31$, 女子$M=4.07$),「満足いくまでできたこと」(男子$M=4.19$, 女子$M=3.66$),「表し方を試しながらできたこと」(男子$M=4.13$, 女子$M=3.66$)で男子の方に高い値が見られた。

これまでの「できた」と決める背景についての結果から,「よかった」と感じることについても「④自分の思うような方法でできたこと」や「⑦満足いくまでできたこと」という目標への満足や手応えに関する項目に高い値を示すだろうと考えた。しかし,「④自分の思うような方法でできたこと」は高い値を示したが,「⑦満足いくまでできたこと」は他の項目に比べると高い値とは言えず，子どもが「よかった」と感じることと「できた」と決めることは必ずしも一致しないと考えられる。

また，友達や先生から認められること，つまり評価されることをあまり気にしていないことや，評価をされることが「よかった」と感じることにつながるわけではないと考えられる。

それに対し,「⑧表し方を試しながらできたこと」や「⑨作品が出来るまでの変化を見たこと」の項目は高い値を示していることから，自分の成長や変容を感じることが「よかった」につながると考えられる。

また,「③新しい材料が使えたこと」「⑤新しくできるようになったこと」「⑥新しいアイデアが思いついたこと」なども評価されることに比べ高い値を示している。これらは子どもが新たな発見に価値を感じていることの表れであると考えられる。他の教科の学びと同じように，図画工作科の学習においても，作品をつくる過程で新たな気付きや発見をしたり，そのことから新たなアイデアが思い付いたりすることが，学習に対して「よかった」と感じることにつながると考えらえる。

次に,作品に対する「お気に入り度」と「よかったと感じたこと」の相関を表８に示す。

お気に入り度と強い正の相関を示しているのは「⑦満足いくまでできたこと（$r=.62$, $p<.01$）」「④思う方法でできたこと（$r=.54$, $p<.01$）」である。目標への満足や手応えが作品のお気に入り度に影響していることがうかがえる。「⑥新しいアイデアが思いついたこと($r=.44$, $p<.01$)と「⑨作品が出来るまでの変化が見られたこと（$r=.38$, $p<.01$）が中程度の相関を示した。これらの結果から，表７「よかった」と感じたことの結果で高い値を示したことは作品のお気に入り度とも関連していると考えられる。

また,「⑦満足いくまでできたこと」はほとんどの項目に関わってある程度強い相関の値を示していることから，その他の項目間における相関を

表８　お気に入り度と「よかったこと」の相関

	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨
お気に入り度	.33 *	.16	.09	.54 **	.30 *	.44 **	.62 **	.28 *	.38 **
①	−	.62 **	.13	.32 *	.23 +	.29 *	.53 **	.47 **	.24 +
②		−	.24 +	.24 +	.12	.08	.41 **	.34 **	.29 *
③			−	.19	.23 **	.12	.18	−.11	.43 **
④				−	.24 +	.57 **	.58 **	.37 **	.21
⑤					−	.41 **	.35 **	.10	.57 **
⑥						−	.50 **	.21	.31 *
⑦							−	.34 **	.54 **
⑧								−	.15
⑨									−

+p<.10 *p<.05 **p<.01

①友だちから認められたこと
②先生から認められたこと
③新しい材料が使えたこと
④自分の思うような方法でできたこと
⑤新しくできるようになったことがあったこと
⑥新しいアイデアが思いついたこと
⑦満足いくまでできたこと
⑧表し方を試しながらできたこと
⑨作品が出来るまでの変化が見られたこと

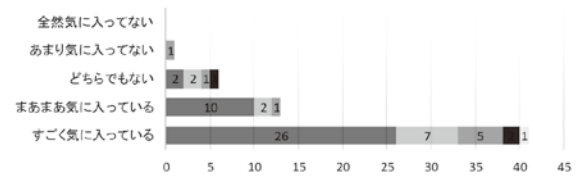
見たところ,「①友だちから認められたこと」と「②先生から認められたこと」(r＝.62, p<.01),「④思う方法でできたこと」と「⑥新しいアイデアが思いついたこと」(r＝.57, p<.01),「⑤新しくできるようになったこと」と「⑨作品が出るまでの変化を見たこと」(r＝.57, p<.01) で強い相関が見られた。さらに,「①友だちから認められたこと」と「⑧表し方を試しながらできたこと」(r＝.47, p<.01),「③新しい材料が使えたこと」と「⑨作品が出来るまでの変化を見たこと」(r＝.43, p<.01),「⑤新しく出来るようになったことがあったこと」と「⑥新しいアイデアが思いついたこと」(r＝.41, p<.01)に中程度の相関が見られた。

「①友だちから認められたこと」と「②先生から認められたこと」における強い相関については，特定の対象に限らず，他者からの評価に対する強い意識の表れであると考えられる。また，「①友だちから認められたこと」と「⑧表し方を試しながらできたこと」に中程度の相関が見られる。実際の活動場面では自分で思い付いたり考えたりしたことを試してみた後，その結果から次にどうするかを判断することが必要になる。その際，友だちからの肯定的な一言が「(試して) よかった」と感じることにつながると思われる。「⑨作品が出来るまでの変化を見たこと」と「⑤新しくできるようになったこと」や「③新しい材料が使えたこと」の相関については，新しい材料や技法などを経験すると，そのことによって自分の表現や作品がどのように変化するのかを確かめたくなるものである。この結果は表７で示したことと重なるものである。

３．３　「もう１時間」に求めること

「もしもう１時間あったら作品作りを続けるか」に対する回答をお気に入り度ごとに表した結果を図１に示す。この設問は子どもの「つくり，つくりかえ，つくりつづけようとする」意識の表れをみるものである。

作品を「気に入っている」という回答をしたグループ（「すごく気に入っている」41人，「まあまあ気に入っている」13人，計54人）のうち，83%が「もしもう１時間あれば続ける」と回答してい



	すごく気に入っている	まあまあ気に入っている	どちらでもない	あまり気に入ってない	全然気に入ってない
絶対続ける	26	10	2		
まあ続ける	7	2	2		
どちらでもない	5	1	1	1	
あまり続けない	2		1		
絶対続けない	1				

図１　お気に入り度と「あと１時間」

る（「絶対続ける」36人，「まあ続ける」９人，計45人）。また，「気に入らない」グループ（１人）に「もう１時間あれば続ける」という回答は見られなかった。お気に入り度の高い方にもう１時間続けたいという意識が見られる。

これまでの結果から，作品のお気に入り度には「目標への満足や手応え」「成長や変容を感じること」「新たな発見に価値を感じること」などの内面的な意識が影響していると考えられた。また，子どもが「できた」と決める背景には「計画」と「満足」という２つの要因が個人の内面に存在していると考えられた。これらのことから，お気に入り度に肯定的な回答を示しているということはある程度の手応えや満足感を感じており，自分の作品に対して「できた」と感じている傾向にある状態だろうと思われる。そのことと「もう１時間あれば続けたい」という回答の多さは一見矛盾するように思われる。なぜなら，実際の授業場面において「もう１時間続けたい」という言葉が子どもから聞かれるのは作品がまだ完成していない，完成させたいという場面が多いからである。

続いて「もしもう１時間あったら作品作りを続けるか」に対する回答とその理由を図２に示す。記述された理由には内容の類似したものも見られることから，「①もっとしたいこと・アイデア」「②テーマに近づけたい」「③表現（作品）への期待・可能性」「④手応え」「⑤楽しさを追求」「⑥未完成・不十分」「⑦妥協」「⑧失敗への恐れ」「⑨完成」の９種類に分類した。

図１において，「気に入っている」グループで「もう１時間あれば続ける」と回答した理由を見ると，「①もっとしたいこと・アイデア」と「③表現（作品）への期待・可能性」が多数を占めている。一方，同グループで「続けない」と回答した理由としては「⑨完成」と感じているものがほとんどであった。また，お気に入り度で「どちらともいえない」「あまり気に入らない」と回答したグループの「もう１時間」に対する回答理由を見ると,「続ける」理由としては「③表現（作品）への期待・可能性」及び「⑥未完成・不十分」が該当した。

これらの結果から，子どもの「もう１時間あれば続けたい」という意識は，お気に入り度によってその内容が異なると考えられる。お気に入り度が高いグループの子どもにとっては「まだアイデアが浮かびそう」「作品をもっとよくしたい」というような，よりよいものや更なる手応えを目指そうとするものが中心であると考えられる。記述内容にも内容や方向性が漠然としているものが多く，「これができていないから」「ここをやり遂げたいから」という具体的な課題ではなく，「よりよくしたい」という価値追求に向かうものであると推察される。手応えや満足感などの要因がお気に入り度や「できた」の決定に影響しているということからも，子どもはある程度の物理的な完成ではなく，“自分の納得を伴った完成”を目指す傾向にあると考えられる。

「もう１時間続けたい」という言葉が子どもから聞かれるのは作品がまだ完成していない，完成させたいという場面というように一見捉えられる。確かにそのような状況もあるだろうが，それよりも作品を気に入っているからこそさらによくしたいという思いはむしろ自然であり，そのような思いが「つくりつづけたい」という意欲につながるのではないか。

Ⅳ　終わりに

本研究では図画工作科の作品制作の終わりに「できた」と終える姿と，「もっとしたい」と続

お気に入り度	あと1時間続けるか	記述	分類
すごく気に入っている	絶対続ける	もっと付け足したいものがあったから	①もっとしたいこと・アイデア
		もっと飾りをつけたいから	
		もう少しおもしろいところをくわえたりしたい	
		まだまだアイデアがあるから！	
		色がカラフルにというのを目指していたからカラフルにできたと思うけど、他の色もあわせてもっとカラフルできると思うから。	
		色は工夫できるし、空も広げられるから。	
		きれいな色を、時間をかけてつくってぬれるから。	
		もっともっと楽しいparkをつくりたいから。	②テーマに近づけたい
		もっと自分の作品をテーマに近付けるため	
		しっかりしすぎるからもっと楽しくなるような工夫をしたいから	
		もっと良い作品にしたいから。	③表現（作品）への期待・可能性
		もっとすごいのを作りたいから	
		もっと素晴らしい作品ができると思うから。	
		もっと作ったらすごいことになるから。面白くなりそうだから	
		このまま作り続けて行くともっと面白い作品になると思うから	
		つけくわえるともっとすてきな作品になると思うから	
		自分の１番の作品にしたいから。	
		まだまだやれることがたくさんあるし、やれることは無限にある	
		もっとこんなのを作りたかったから	④手応え
		すごく楽しかったし、同じのをたくさんつくりたい	⑤楽しさを追求
		楽しいから	
		時間がなくてまだ途中だったから、仕上げたい	⑥未完成・不十分
		ボンドが見えているから	
		まだ部品があるから	
	まあ続ける	ぐるぐるをふやしたい	①もっとしたいこと・アイデア
		色はぬり終わったので、針金などを付けたして色をぬる。	
		付け足しをしたい	
		いいアイデァが思いつきそうだから	③表現（作品）への期待・可能性
		まだよ～く見てみると足りない所もみつかるかもしれないから	
		かなり良い感じになったから。	④手応え
	どちらともいえない	もう完成しているけどまだやりたい	⑦妥協
		自分のは全て作り尽くしてしまったから。１時間はいらない	⑨完成
	あまり続けない	もう終わってるし、あとちょっとぐらいだから	⑨完成
		もう少しやると変になってしまうから	⑧失敗への恐れ
	絶対続けない	時間内に全部作り終わったから	⑨完成
まあまあ気に入っている	絶対続ける	新しい工夫をまたくわえられると思うから。	③表現（作品）への期待・可能性
		もうちょっと工夫できそうだから	
		まだつくりたいものがあるから	⑥未完成・不十分
		たりない	
		できたといえばできたけど、まだまだぬりのこしがあるから。	
	まあ続ける	もう少しオリジナリティーを足したいから。	①もっとしたいこと・アイデア
	どちらともいえない	どっちでもいいから	⑦妥協
どちらともいえない	絶対続ける	まだ材料が残っていたし、もう少し工夫できるから	③表現（作品）への期待・可能性
		まだまだたりないから。	⑥未完成・不十分
	まあ続ける	もう少しやったらもっといい作品になると思うから	③表現（作品）への期待・可能性
		色を丁寧にぬれなかったから	⑥未完成・不十分
	どちらともいえない	もう休みたい時もあるし　やりたいときもあるから	⑦妥協
あまり気に入らない	どちらともいえない	やってて楽しいと感じなかったらやらないから	⑦妥協

図２　「あと１時間」に対する意識

けようとする２種類の子どもの姿が見られることから，「できた」と決める判断の背景に働いている意識を明らかにするべく検証してきた。

小学校４年生と５年生61名（５年男17名・女15名）を対象とした図工の学習についてのアンケートによる意識調査の結果から，「できた」と終わりを決めることに影響を及ぼしているのは「十分にできた」「予想以上にできた」「計画通り」など，個人の満足や手応えなど内面に関することであることが明らかになった。仮説では，子どもは「時間」に合わせて表現を終えるだろうと考えていたが，「時間だから」「材料がなくなったから」など

の外的な理由ではなく，子どもは自分自身で「やった，できた」と納得して決めることを大事にしているということが明らかになった。

相関を分析した結果，個人の満足や手応えでやや強い相関が見られた。このことは「よかった」「お気に入り」という項目の分析結果にも同様の傾向が見られたことから，個人の満足や手応えを感じたときに「よかった」「お気に入り」と感じることが分かった。

また，３．３「もう１時間」に求めることに示したように，作品へのお気に入り度が高いほど「もう１時間続けたい」という回答が多く，その理由は「よりよくしたい」という価値追求に向かうものであることが明らかとなった。個人の満足や手応えなどの要因がお気に入り度や「できた」の決定に影響しているということからも，子どもは「自分の納得を伴った完成」を目指す傾向にあると考えられる。

図画工作科の学習で「つくり，つくりかえ，つくりつづける」子どもの姿を目指すには，一人一人が自分自身の手応えや満足を感じることができるような学習活動の構成や展開の工夫，制作過程における自己評価の工夫などが求められるだろう。

今後の課題として，そのことを教科として限られた時数の枠で，どのような方法であれば効果的に行うことができるのか，実践を通して検証していくことが求められる。また，今回の調査は２つの学年の限られた題材でのものであった。他の学年や内容ではどのような意識が見られるのかが今後の課題として検討が求められる。

引用文献・注釈

１）文部科学省「学習指導要領解説　図画工作編」p10，日本文教出版，2017

２）青木善治「子どもが生きる力を育む造形活動に基づく教育実践研究」p1，兵庫教育大学大学院連合学校教育学研究科学位論文，2017

参考文献

阿部　宏行『小学校　新学習指導要領ポイント総整理　図画工作』東洋館出版社　2017

鬼丸　吉弘『創造的人間形成のために』勁草書房　1996

鹿毛　雅治『学習意欲の理論～動機付けの心理学～』金子書房　2013

佐伯　胖　『学ぶということの意味』岩波書店　1995

佐伯　胖　『わかるということの意味』岩波書店　1995

宮坂　元裕『「造形教育」という考え方』日本文教出版　2006

宮坂　元裕『「図画工作」という考え方』黎明書房　2016

山本　正男『美術教育学への道』玉川大学出版部　1981

（中村　珠世　北海道教育大学附属札幌小学校教諭）

（李　　知恩　北海道教育大学札幌校准教授）

（森實　祐里　札幌市立大倉山小学校教諭）

（菊地　惟史　札幌市立円山小学校教諭）